

二つの文化のはざまで

— 日仏女性作家の作品におけるエートス構築の言説メカニズム

石 丸 久美子

< Résumé >

Dans cet article intitulé « Regards croisés entre deux cultures : construction discursive de l'*ethos* auctorial dans les ouvrages de deux femmes écrivains française et japonaise », nous avons analysé des discours stéréotypés dans deux ouvrages de femmes écrivains française et japonaise. À travers leur discours, nous avons observé la construction discursive de l'*ethos* auctorial, par des opérations sémantiques de discrimination des identités présumées de leurs lecteurs respectifs. En conclusion, nous avons constaté que les auteures construisent leurs images de soi, c'est-à-dire leurs *ethè* spécifiques. Elles utilisent leurs statuts particuliers et privilégiés que leurs lecteurs « modèles » n'ont pas et exposent leurs propres expériences en France et au Japon comme « Témoin des événements » (selon Maingueneau 2007, p. 112) en s'adressant à une collectivité de la communauté imaginaire.

Mots clés : *ethos* auctorial, discours stéréotypés, identités, France, Japon

1. はじめに

本稿は、2016年3月17～18日にフランス、ナント大学で行われた「フランス語圏作家のエートスとアイデンティティ (*Ethos et identités de l'écrivain francophone*)」シンポジウムにおける筆者の発表を和訳し、加筆修正したものである。日本とフランスの女性作家の二作品において、互いの国、国民、文化についてのステレオタイプの言説を分析するとともに、作家自身のアイデンティティ、言い換えればエートスがどのように構築されているかを考察したい。

エートス (*ethos*) は、アリストテレスによって哲学的用語として用いられ、「性格・習性など、個人の持続的な特質」(『大辞林』第三版)を指すとされる。本論文では、言説分析領域における「発話行為を通して現れる発話者の人格」(Maingueneau 2012, p. 88)、「話す主体が、自らに地位と役割が割り当てられる構造的なある一空間に溶け込み、自身のアイデンティティを構築する方法」(Amossy 2015, p. 38)という定義を援用し、分析を進めていく。そして、二人の女性作家が、自身の特殊な地位、つまり、日本とフランスにおける自らの体験を述べるというエートスを巧みに用いているという仮説を検証していきたい。

2. 問題提起と分析方法

二人の女性作者の自己像、つまり言説的エトスは作品の中でどのように作り上げられているのか。彼女たちは読者に対して自らをどのように位置づけているのか。このような問題提起を挙げ、Galatanu (2008, p. 15) が「自分特有の世界を作る、自己と世界の言語構築実践の研究」と定める言説分析領域において本研究を進めていく。

調査方法としては、まずコーパスである二作品の中に見られるフランス女性、日本女性、フランス、日本、フランス人、日本人についてのステレオタイプの言説を抜粋し、分析する。このステレオタイプの言説分析領域は、研究目的の中心ではなく、これらの分析を通し「発話装置¹⁾」を考察することで、著者の立場についての解釈を試みる。特に、人称代名詞の「私は (je)」と発話装置で言う「エロキュティブ (élocutif)」に焦点をあてる。

エロキュティブは発話主体を示す言語マーカの存在によって定義される。Charaudeau (1992, p. 575) は、「エロキュティブは『話し手が自らの言葉を自身と関係づける』」とし、Amossy (2015, p. 10) は、『『私は』における言説研究が重要である。それが言葉のやりとりにおいて、どのようにアイデンティティが構築されているか考察することを可能にする』と述べている。そして最後に、分析を Charaudeau (1983) がいう言語行為の「内的回路 (circuit interne)」と「外的回路 (circuit externe)」の概念にあてはめることで、言説のメカニズムを解明したい。

3. コーパス紹介

本研究コーパスは二つの文学作品である。1冊目は西村・ブベ・カリン (Karyn Nishimura-Poupée) 著『フランス人ママ記者、東京で子育てする』(石田みゆ訳、大和書房)で、本書は2015年に日本のみで日本語で出版された。西村・ブベ・カリン氏はジャーナリストで、2004年からAFP通信 (Agence France-Presse (AFP)) 東京特派員をしている。夫はジャン＝ポール・西というペンネームの日本人漫画家。本書では、日本での妊娠、出産と子育ての経験をフランス人の視点から描き出している。

2冊目は Eriko Nakamura (中村江里子) 氏による *Nââândé !? Les tribulations d'une Japonaise à Paris* (『ナンデ!? 一人の日本人女性のパリでの試練』) (NiL éditions) というタイトルで、2012年にフランスでフランス語書籍として出版され、2013年に日本向けに『12年目のパリ暮らし パリジャン&パリジェンヌたちとの愉快で楽しい試練の日々』というタイトルで日本語で出版された。本稿ではフランス語原書をコーパスとし、日本語訳は原則的に日本語版から引用し、一部変更点は筆者が訳した。西村・ブベ氏の著作同様、自伝的小説であり、非常に読みやすく娯楽的な内容となっている。中村氏は日本ではフリーアナウンサーでパリ在住の「セレブ」タレントとして有名である。フランス語版裏表紙での著者紹介では、日本人(女性)の憧れの人物とされている。少し長いが以下に引用する。

中村江里子は日本の有名人。10年間にわたりフジテレビでゴールデンタイムのバラエティー番組の司会、最も人気の高いスポーツである野球番組の司会を務め、日本のテレビ界における著名人の一人である。彼女はまた、フランスに住むという多くの日本人の夢を叶えた人物として知られている。フランス人と結婚し、三人の子どもの母親。10年前からパリと東京を往復しながら生活している。

4. 分析結果

「作家は作品を作るが、作家と作品はそれ自体がまさに実践の制度的複合体というべきもので形成されている」と Maingueneau (2007, p. 112) は述べるが、このことはこれら二人の日仏の作家においても同様である。彼女たちは自伝的小説という同じ種類の言説を選択し、楽しく読みやすいものとなるよう、親しげで平易な言語領域を用いる。実際、彼女たちは、まるで目の前にいる女友だちに話しかけるかのように、自らの日本とフランスでの実体験をほぼ会話のような言葉づかいで語るのだ。

まず、フランス人作家、西村・カリン・プベ氏の作品から考察する。彼女の言説においては、実に頻繁に自身の立場が示される。特に、フランスと日本を比較できるという自身の知識と能力、そしてジャーナリストであることがくりかえし強調される。つまり、日本における特派員の役割を演じたいという意図と自信が読み取れる。以下は、著者が自身について語り、自己ステレオタイプを生成している部分の抜粋である（強調は筆者による）。

- 10年以上日本に暮らし、2012年のはじめに日本人と結婚したわたしが祖国を離れたまま日本での出産を決めたことで、日本人の女性からはもちろん、男性たちからもその理由を尋ねられることが多かった。(p. 3)
- フランスを出て10年になるけれど、あちらでは何もそこまで彼ら「子どものいない人」に罪悪感を持たせたりしないと思う。(p. 129)
- 日本人社会をそれなりに知っているわたしでさえも、フランスとの違いにあらためて驚いてしまう。(p. 157)
- この章の最後に、みなさんを勝手に代表して、育児の心配ごとを育児のプロに率直に聞いてみた。[中略] フランス人ママ記者として本領発揮である。(p. 189)
- フランス人として日本に暮らしていてわたしがよく思うのは、日本人は家庭を持つことについて、気持ちより頭で考えがちだということ。(p. 237)
- フランス人であるわたしが、日本という異国の地で、愛する夫と、びっくりするぐらい速いスピードで成長していく息子（どこの子どもも同じだと思うけれど）と過ごす日々の中で考えていることを、さらに多くの人たちとシェアしたいのだ。(p. 260)
- 日本人の夫と息子と日本社会で暮らすわたし自身だって、もはや典型的なフランス人とは

言えないし、必要に迫られれば、自分の考えを曲げることだってある。(p. 265)

- 10年以上前から、ジャーナリストとして、日本にすんでいる。その前に11年間パリ暮らしの経験がわたしにはある。ある程度、日本の社会とフランスの社会をくらべることが、わたしにはできると思う。(p. 266)

著者は自身のジャーナリストとしての経歴を強調し、本のタイトルにあるように、自身を「フランス人ママ記者」を名づける。さらには、数多くの引用をするジャーナリスト特有のスタイルを採用している。例えば、いくつもの数字や統計、学会名や雑誌名を挙げることで、自身の言説に威厳、格式、真実味を与える。以下はその例である。

- ちなみにフランスでは無痛分娩 63 パーセント、帝王切開 20 パーセントとある (2010 年フランス政府調べ)。(p. 38)
- 一方、日本全国の無痛分娩の割合は平均で 10 パーセント以下。(p. 41)
- …と日本産科麻酔学会も述べている。(p. 41)
- これは、www.nounou-paris というサイトに掲載されている広告の一例だ。(p. 144)
- フランスで有名な雑誌の 1 つ『Parents (両親)』の記事は、こう書いている。(p. 212)
- 女性向けのウェブサイト『aufeminin.com』がこう指摘している。(p. 247)
- 子どもの権利を擁護する活動で知られるフランス人女性、クレール・ブリセの言葉を借りれば…(p. 250)

ここからは、著者が日本の「モデル」読者 (lecteur « modèle ») (Charaudeau et Maingueneau 2002, p. 338-339) をどのような他者ステレオタイプで描いているかを分析していきたい。著者である西村・ブペ氏は「日本人女性たち」「女性」「彼女たち」という表現を使い、冷静かつ客観的に日本女性を考察する。

- それを、この本を手にとってくれた日本人女性たち — その中には、フランスで暮らすことを夢見ている人もきっといるはず — と共有したい。(p. 4)
- フランス人との結婚を考えている女性は、覚悟しておいたほうがいいかもしれない。(p. 108)
- 彼女たちは単純に、サラリーマンたちが連日の激務でへとへとに疲れ、責任の重圧と疲労感からストレスにまみれる様子を見て、同じような目にはあいたくないと思うようだ。(p. 150)
- それでも、彼女たちは権力を失うわけではない。日本では、家庭のサイフの紐を握るのは女性だ。(p. 152)
- 彼女たちは真面目だ。いつでも完璧に家事をこなさなければいけないと思ってしまうから。

(p. 245)

上記のように冷静な視線を向けると同時に、次の二つの抜粋にあるように、「共有したい」「わたしも」という言葉によって、著者は自らも同じように日本の住民、そして未来の母親たちの一員であることを強調する。

- 日本人らしく、少し切れ長の目をしたかわいい赤ちゃんを、日本人のパパと日本で育てていくこと。それは、わたしの人生で、もっともすばらしい経験のひとつ。それを、この本を手にとってくれた日本人女性たち——その中には、フランスで暮らすことを夢見ている人もきっといるはず——と共有したい。 (p. 4)
- チラシを読むかぎり、未来のお母さんたちにとって理想的なタクシーサービスだと思う。わたしも、この一枚は手元に置いておきます。 (p. 54)

ここからは、日本人作家、中村江里子氏の著書の分析を行う。『ナンデ!? 一人の日本人女性のパリでの試練』という作品タイトルが示すように、著者は本書において、自身のパリ生活における災難の日々、10年にわたるフランス生活を経てもなお、時に経験するフランス人の衝撃的な行動を次々と語る。しかし同時に、「je suis devenue un peu plus parisienne ([私は²⁾] パリジェンヌに少し近づいてきた)」というように、今では自らにフランス文化について十分な知識があることを示すのを忘れない。また、「pays d'adoption (私を受け入れてくれた国)³⁾」と言うように、フランス・パリに対しての愛を告白する。

- Plusieurs fois par jour j'étais et je reste sans voix face à certains comportements typiquement parisiens. (一日に何十回 [私は] ビックリ仰天し、典型的なパリジャンの振る舞いに声をなくし、茫然自失となりました。) (p. 14)
- Si j'arrive aujourd'hui à mettre des mots derrière ce « Nââândé !? » [« Oh non ce n'est pas possible. »], c'est sans doute parce que je suis devenue un peu plus parisienne. (今日、この“Nââândé !?” (『ナンデ!?』) で、パリでの経験を説明できるのは、[私が] きっとパリジェンヌに少し近づいてきたからに違いありません。) (p. 14)
- Aujourd'hui, j'ai toujours ce réflexe de me dire que c'est ma faute mais j'entends aussi une petite voix me dire : « Eriko, tu n'as peut-être rien fait de mal. Si ça se trouve, c'est juste un comportement parisien. » ([私は] 今でも反射的に自分が悪いのでは? と考えてしまいますが, 「エリコ、あなたは何も悪いことはしていない。つまりこれはパリジャンのあたりまえの振る舞いなよ」 とささやく声も聴こえるようになりました。) (p. 15)
- Cette petite voix je la dois à tous les Parisiens que je fréquente : Achille, Agnès, Amandine, Amélie, Arnaud, Barbara, Basil, Camille (このささやきを私が親しくしているパリ

ジャン&パリジェンヌたちに「私は」伝えたいと思いました!! アシル, アニエス, アマンディース, アメリー, アルノー, バルバラ, バジル, カミュー…) (p. 15)

- ... : j'ai écrit ces tribulations comme une déclaration d'amour à mon pays d'adoption. « Qui aime bien châtie bien » est un dicton typiquement français, non ? (私を受け入れてくれたフランス・パリに対する愛の告白のつもりで, 「私は」 苦い体験を書きました。「愛すればこそそのムチ」は典型的なフランスの格言ですよね。) (p. 16)

次のテキストにおいては、「je sais (分かっています)」「je sens bien que (はっきり認識しています)」⁴⁾という表現によって、自身がフランス人社会を理解する知識と能力を有していることを強く誇示する。しかしまた同時に、「je réagis juste en Japonaise (私は今も日本人として反応してしまいます)」「chez nous (我々のところでは)」と言うことによって、フランスに住んでいながらも常に日本人として反応し、感じていることを示すことで、読者に自分を日本女性として扱い、捉えてほしいとほめかすのである。

- Je sais : m'étonner de cela risque de me faire passer pour égoïste, insensible à la dégradation des conditions de travail des fonctionnaires, mais en fait je réagis juste en Japonaise : chez nous, les dirigeants syndicaux qui inciteraient à une action de grève dans le secteur public peuvent être licenciés ou emprisonnés pour une durée de trois ans ! (フランスではこんなことで驚いていたら、公務員の労働条件の悪化に対して関心を払わないエゴイストだと思われるかもしれません。とはいうものの私は今も日本人として反応してしまいます。我々のところでは、公的機関でストライキを起こした労働組合の代表者は、解雇されるか3年の禁固に処せられることもあるのです！⁵⁾) (p. 51)
- Je sens bien que cette initiative paraît très bizarre aux Parisiens qui ne comprennent pas que les Japonais de Paris se sentent obligés de décoinçer les centaines de mégots encombrant les grilles d'aération. (なぜパリ在住の日本人が、歩道の通気口や溝に詰まった何百ものタバコの吸殻を必死に取り除こうとしているのかわからないパリジャンには、この活動は奇妙に思えるのかもしれません。) (p. 90)

また、本コーパスでは、Galatanu のいう「エロキュティフ・アロキュティフ⁶⁾」、つまり「nous (私たちは)」「notre, nos (私たちの)」が非常に頻繁に用いられていた。これはすなわち、発話主体 + 受信者^{フランス}という存在を示す。このことは、著者が日本文化・社会に非常に執着しており、日本人として感じ、日本式に考えているということをも暗示している。つまり、著者は日本女性に自身を組み入れ、同化しているのだ。実際、本名はエリコ・バルト (Eriko Barthes) であるにもかかわらず⁷⁾、現在も「中村」という日本名を主に使い続けている。日本でのキャリアの長さから日本名を使用しているというのもあるが、あえて日本名を使用することでフランス人

読者の関心を引きつけ、その期待に応えようとしているとも考えられるのではないか。

- La culture japonaise nous apprend justement à ne jamais montrer nos sentiments. (日本の文化は反対に、[私たちは] 人前ではできるだけ [私たちの] 感情をあらわにしないように努めます。)(p. 56)
- Le seul problème, c'est que nous n'en faisons plus [des enfants]... (ただ、残念なのは、お行儀のいい [私たち] 日本の子どもたちの数がなかなか増えないということ。)(p. 73)
- C'est comme cela que, dès notre plus jeune âge, nous sommes sensibilisés à l'hygiène de ces lieux. (このように、私たちは、[私たちが] ほんの幼いころから、これらの場所 [トイレ] の清潔さに注意を払うようになるのです。)(p. 93)
- Nous, les femmes, jouons donc constamment à cache-cache avec le soleil grâce à des ombrelles, des casquettes anti-UV, des manchons de protection des avant-bras... Et en plus des accessoires, nous consommons beaucoup de produits cosmétiques bihaku (blanchissants) depuis les années 1980. (日傘、UV カットの帽子や服、アームカバーなどなど…… [私たちは] できるだけお日様と友達にならないように必死の防御!! / 日焼け防止グッズに加え、1980 年以降には美白用化粧品もよくつかわれるようになりました。)(p. 97)
- ... notre idéal esthétique reste un teint pâle et blanc. (やっぱり私たち日本人にとっては色白は美しさの象徴なのです!!)(p. 98)

Amossy (2015, p. 212) によれば、「『nous (私たちは)』の使用は、話し手に自らを、個々の違いを打ち消して統一したイメージに投影させ、ある共同体、ある党派、ある国、ある職業集団の代わりに話すスポークスマン、代弁者となることを可能にさせる」。さらに、日本とフランスの化粧品広告を比較分析した筆者の過去の調査においては (Ishimaru 2004, 石丸 2007), 「nous (私たちは)」の使用は日本広告のみで観察された。このことから、「nous (私たちは)」を用い、自身とその受け手を同一化、一体化させた言説は、おそらく日本人に特有のメンタリティを反映したものであると考えられる。

ここまで、本著者がいかに日本文化・社会に自身を結びつけ執着しているかを考察してきた。しかしながら同時に、フランス人読者のポジティブ・フェイス (Brown and Levinson 1987) を維持するよう配慮することも忘れていない。それを示すのが、以下のような「情意的 (Galatanu 2002)」な意味価値⁸⁾を含む発話である。

- Une chose que j'apprécie beaucoup chez les Français, c'est que personne ne veut ressembler à son voisin. (私がフランス人を高く評価することのひとつに、他の誰かと同じだなんていや!! ということがあります。)(p. 79)

- Ce qui me plaît chez les Françaises, c'est qu'elles sont beaucoup plus détendues sur ce sujet. (フランス人女性は肌の手入れやメイクに関して、もっともとおおらかで、素敵だなど思いました。) (p. 99)
- Voilà pourquoi tant de femmes japonaises rêvent d'épouser un gaijin (un étranger), et notamment un Français — les plus romantiques des gaijin — car ici les rôles sont moins figés. (そういう訳で多くの日本人女性が外人, 特に — 外人の中でも最もロマンティックな — フランス人と結婚したいと望んでいます。なぜなら, ここでは, [女性の] 役割はそれほど決められてはいないのです。)

5. 結論

以上の分析を通して, 非常に異なる文化を有する二つの国に身を置く, 日仏両国の二人の作家が, それぞれの立場, 経歴を誇示しながら, フランスの読者と日本の読者に合わせた独特の言説を生成していることが確認できた。Amossy (2015, p. 46) が, 「それが誰であれ, 個人が, 国, 階級, 職業, 共同体の一員として自分自身に持っている表象は, 社会的相互作用での姿の現し方によって具体化し始める。個人は, このように自らを位置づけるアイデンティティを構築しながら, 無意識的にあるいは意図的に, 認められた文化モデルにしたがって自身の言説的エートスを形成する」と述べる通りである。

ここで最初の問題提起に戻ろう。自己像, つまり, 言説的エートスは作品の中でどのように作られられているのか。作家たちは読者に対して自らをどのように位置づけているのか。これに対しては, 著者たちは, 自己像, 言い換えれば, 特別なエートスを巧みに作り上げていることが確認でき, 仮説が実証できた。彼女たちは, 「モデル」読者が有していない特別で, 恵まれたステータスを用い, 想像の共同体 (Anderson 1983) の集団に向けて, 日本とフランスでの自らの体験を「出来事の証人 (Témoin des événements)」(Maingueneau 2007, p. 112) として説明するのだ (図1参照)。

最後に, Charaudeau (1983) の概念に基づいて作成した言語行為の二つの回路の図を提示する (図2参照)。本稿のコーパスをあてはめた場合, 伝達主体の「私」(実在の作家) と解釈主体の「君」(実在の読者) が社会的存在として外的回路に存在する。それに対し, 発話主体の「私」(話し手) と受信主体の「君」(作家が想定している「モデル」読者, 言い換えれば「理想の読者」) がパロール (言行為) の存在として内的回路に存在すると言えよう。

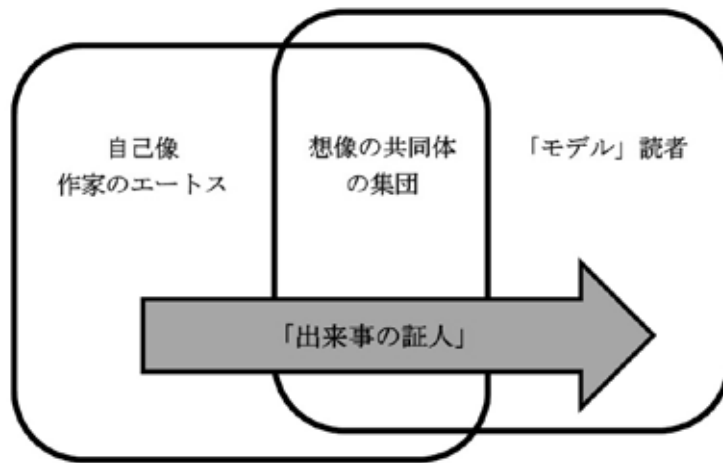


図1: 「出来事の証人」の図式

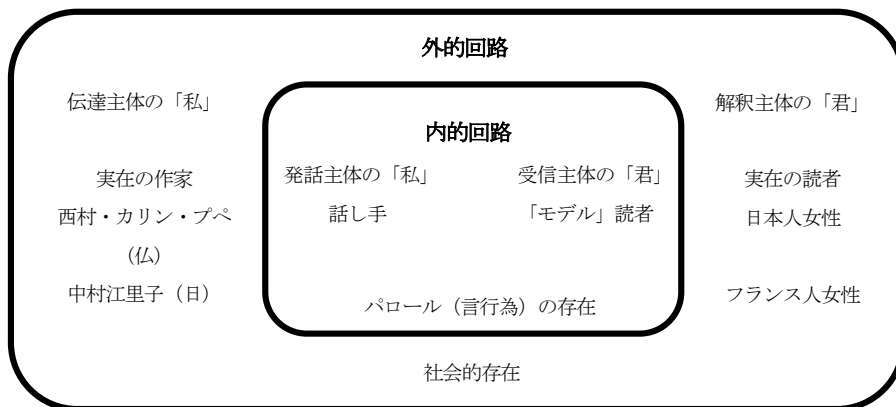


図2: 言語行為の二回路

注

- 1) 発話装置は、フランス語では *dispositif énonciatif* とされることが多いが、Charaudeau (1992) は *appareil énonciatif* という呼び方を提案する。
- 2) 日本語では主語が省略される場合が多いため、原文にはない主語を筆者がカギ括弧に入れて明示した。
- 3) フランス語の *adoption* という単語は「養子縁組」という意味があり、*d'adoption* には「自分で選択した」「帰化した」という意味もある。しかし、中村氏は日本国籍のままであることから、ここでは「第二の祖国」という意味での「受け入れてくれた国」であろう。
- 4) 日本語版ではそれぞれ「思われるかもしれません」「思えるのかもしれませんが」とされているが、フランス語版では、「分かっています」「認識しています」と自らがフランス人の思考、態度をよく理解しているということが示されている。
- 5) この最後の文章は日本版では削除されている。

- 6) フランス語では *élocutif-allocutif*。アロキュティフは「話しかける相手の人（二人称）」である伝達主体のマーカ―の存在によって定義される（Charaudeau et Maingueneau 2000, p. 354）。エロキュティフ・アロキュティフは、ナント大学言語科学科博士課程にて開講された Galatanu 教授による *Sémantique et pragmatique*（意味・語用論）の授業での提案。
- 7) 所属事務所、株式会社グローバルプロモーションのホームページでの情報。www.global-pro.co.jp/talent/ 中村・江里子（2017年9月30日アクセス）
- 8) フランス語では *valeurs « affectives »*。

主要参考文献

- Amossy Ruth 2000 : *L'argumentation dans le discours*, Paris, Nathan, Coll. fac.
- Amossy Ruth 2009 : « La double nature de l'image d'auteur », *Argumentation et Analyse du Discours* [En ligne], 3 | 2009, mis en ligne le 15 octobre 2009. URL : <http://aad.revues.org/662> ; DOI : 10.4000/aad.662（2017年9月30日アクセス）
- Amossy, Ruth 2015 : *La présentation de soi. Ethos et identité verbale*, Paris, Presses Universitaires de France.
- Amossy, Ruth et Maingueneau, Dominique (dir.) 2003 : *L'Analyse du discours dans les études littéraires*, Toulouse, P.U.M.
- Anderson, Benedict 1983 : *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London, Verso ; Revised, 2016.（ベネディクト・アンダーソン著 白石隆、白石さや訳『定本 想像の共同体 ― ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山 2007年）
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. 1987 : *Politeness : Some universals in language usage*, Cambridge, Cambridge University Press.（ペネロピ・ブラウン、スティーブン・C・レヴィンソン著 田中典子（監訳） 齊藤早智子他訳『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社 2011年）
- Charaudeau, Patrick 1983 : *Langage et discours. Éléments de sémiolinguistique (Théorie et pratique)*, Paris, Hachette.
- Charaudeau, Patrick 1992 : *Grammaire du sens et de l'expression*, Paris, Hachette.
- Charaudeau, Patrick et Maingueneau, Dominique (dir.) 2002 : *Dictionnaire d'analyse du discours*, Paris : Seuil.
- Galatanu, Olga 2002 : « Le concept de modalité : Les valeurs dans la langue et dans le discours. », Galatanu, Olga (dir.) *Les valeurs*, Nantes, Maison des sciences de l'homme Ange Guépin, p. 17-32.
- Galatanu, Olga 2008 : « La construction discursive de la dimension temporelle des entités lexicales. », Marillaud, Pierre et Gauthier, Robert, *Langage, temps et temporalité*, 28e Colloque d'ALBI, Langages et Signification, Toulouse, CALS-CPST, p. 15-24.
- Ishimaru, Kumiko 2004 : *Analyse du discours publicitaire en France et au Japon : les produits de beauté*, Mémoire de DEA, Nantes, Université de Nantes.
- Ishimaru, Kumiko 2012 : *Stéréotypes et représentations du soi-même et de l'autre en France et au Japon*, Thèse de doctorat, Nantes, Université de Nantes. URL : <http://archive.bu.univ-nantes.fr/pollux/show.action?id=03f6cfc3-8ba1-489e-9ccf-a22e928adb47>（2017年9月30日アクセス）
- Maingueneau, Dominique 2007 : « L'Analyse du discours et l'étude de la littérature », Bonnafus, Simone et Temmar, Malika (éd.), *Analyse du discours et sciences humaines et sociales*, Paris, Éditions Ophrys, p. 109-120.
- Maingueneau, Dominique 2012 : *Analyser les textes de communication*, Paris, Armand Colin.（ドミニッ

- ク・マンガノー著, 石丸久美子・高馬京子訳『コミュニケーションテキスト分析——フランス学派によるメディア言説分析への招待』ひつじ書房 近日刊行予定)
- 石丸久美子『日仏化粧品広告比較分析研究』大阪大学博士学位請求論文 大阪大学 西宮 関西学院大学出版会（オンデマンド出版） 2007 年

